

聖霊のバプテスマ パート2 「生ける水の川」

1A 仮庵の祭り

1B 「祭りの大いなる日」

2B 「だれでも渴いているなら」

1C 三つの部分の渴き

2C 連動する各部分

3C 他の渴きで満たす試み

4C イエスにある命

2A 「聖書の言っているとおり」

3A 「生ける水が流れ出る」

1B 溢れ出る激流

2B 神の聖徒の証し

本文

私たちの学びは、聖霊のバプテスマに入っています。前回、私たちは聖霊のバプテスマという体験が、信じた時に与えられる新生体験とは異なることを学びました。イエスを自分の救い主と信じることによって、聖霊が私たちの内に住んでくださり、キリストの血潮と共に私たちの罪を清めてくださいました。そして私たちをキリストに似姿に変えてくださる働きをしておられます。それと、聖霊のバプテスマは異なることをお話ししました。これは、「あなたがたは力を受ける。そして、地の果てに至るまでわたしの証人となる。」と主が約束されたように、イエスの証人となるための力なのだ、ということです。この方に満たされ、満たされるだけでなく溢れ出て、外部に対して確かにイエスが主であることを明らかにしていく力があります。

私たちが地道に、キリストと共に歩むための内なる聖霊の働きがいつも必要であります。罪に対して死に、キリストに対して生きる時に、御霊がその歩みを助けてくださいます。しかしそれと、聖霊が上から臨まれて、私たちを満たし、そしてイエスを証しするのはまた別であります。教会は、聖霊のバプテスマによって前進すると言っても過言ではありません。信じていることは正しくても、そこに活力と喜びと愛が出てくるのは、聖霊が私たちの上に臨まれるからです。「神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と愛と慎みとの霊です。(2テモテ 1:7)」

そして、私たちは前回、弟子たちが聖霊を受けた出来事を使徒行伝から眺めて行きました。五旬節、ペンテコステから始まり、サマリヤで聖霊が下ったこと、そして教会を迫害していたパウロ自身も回心し、聖霊を受けました。それだけでなく、ユダヤ人ではないローマの百人隊長コルネリオが、福音の言葉をペテロから聞いている時に聖霊を受けました。そして、エペソにおいてイエスを信じていたのにまだ聖霊を受けていなかった人々がいました。イエスを信じたのですから、明らか

に聖霊が内に住んでおられるのに、そのしるしが外に表れていなかったのです。彼らも、水のバプテスマをイエスの名によって受けた時に、聖霊のバプテスマも与えられたのです。

1A 仮庵の祭り

そして今晚は、聖霊のバプテスマを受ける時で内で何が起こるのかについて見ていきたいと思えます。使徒の働きでは、聖霊のバプテスマを客観的にルカが目撃したものが書き記されていますが、今から見るヨハネ 7 章では、イエスご自身が私たちの内で何を行なわれるかを説明しておられます。

37 さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」39 これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ注がれていなかったからである。

1B 「祭りの大いなる日」

今、読んだ箇所は仮庵の祭りの時のことです。「祭りの終わりの大いなる日」とありますが、7 章に戻ると、仮庵の祭りの時にイエス様がガリラヤからエルサレムに上られたことが分かります。イエスへ敵意を抱いているユダヤ人がエルサレムにいたので、初めは内密に行かれましたが、その途中、宮の中で教え始められました。人々がイエスに引きつけられます。イエスを捕えようとした者たちもいました。けれども、まだ時ではなかったので手をかけることができませんでした。そんな中、祭りの終わりの日に、立って大声で叫ばれたのです。

仮庵の祭りは、その名の通り、仮の庵、仮小屋を作る祭りです。イスラエルの民が四十年間、荒野をさまよっていたのに、無事に生き延びることができ、約束の地に入ることができました。神が共におられたからです。神が守り、養い、導いてくださいました。私たちは一昨日、詩篇の中でシナイ山からシオンの山まで主が先頭に立って、敵に戦ってくださったところを読みましたね(68 篇)。その奇跡的な守りを思い起こすためにこの祭りを守りました。

正統派ユダヤ教徒は、普通、ベランダにヤシの葉や、柳のなどで葺いた部屋を作ります、そして、一週間の間、その中で過ごします。寝泊りもしますが、天候が悪ければ食事の時だけとなります。そしてわざと、その屋根にはわずかな隙間を作っておいて、夜空の星が見えるようにするのです。ユダヤ人の祭りはいつも家で行われるものであり、子供に教えるようにしてありますが、子供が、「星が見えるね。」と自然と尋ねます。そこで親が、「私たちの先祖は、四十年間、このように星の下で、荒野で住んでいたのだよ。けれども神が守ってくださった。」と話すことができるのです。

同時に当時はその期間中、祭司たちは毎朝、キデロンの谷の麓にあるシロアムの池に行きまし

た。南の階段から降りて、何段もある階段を降りていきます。そして、そこで水差しに水を満たして、たいまつを掲げ、レビ人は手に楽器をもって、賛美と踊りをしながら水を神殿にまで運び上げるのです。これは聖書には書いていませんが、ユダヤ教の注解書であるタルムードに記録されています。そして、神殿の祭壇の西側に、穴の開いた銀の皿を置いていて、そこに水を注ぎます。これを二日目から七日目まで行っていました。

まさに、イザヤの預言した言葉の喜びです。「あなたがたは喜びながら救いの泉から水を汲む。」(イザヤ 12:3)これは、あの有名なマイム・マイムの歌詞です。マイムとは水のことです。「救い」というヘブル語に「イエシュア」となっており、まさにイエスご自身が救いの泉であり、水が聖霊を表している歌であります。

第一日目と、第八日目は安息日です。第八日目がここにある「大いなる日」であり、この時は祭司によるシロアムの池からの行進はありませんでした。水を注ぎ出すことはありませんでした。なぜか？それは、すでに約束の地に入ったことを八日目は記念していたからです。神が岩から水を出すという奇跡なくして、すでに水の豊かな約束の地にいました。ですから、イエス様はこの八日目に、外庭に何千人も集まっていたところで、立って、大声で、「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。」と言われたのです。

2B 「だれでも渴いているなら」

イエス様は立ち上がられました。普段は、ユダヤ教では教師が座ります。そして弟子たちが立っています。みなさんも今、逆にしてみましようか(笑)。けれども、立つ時には真理を宣言する時がありました。宣言というのは、とても大事ですね。そして、イエスの言われている水は、物理的な水ではなく、霊的な水であります。「1コリント 10:4 みな同じ御霊の飲み物を飲みました。というのは、彼らについて来た御霊の岩から飲んだからです。その岩とはキリストです。」私たち日本人は、どうしても渴くという渴望を理解することができません。水が最も豊富な国に住んでいるからです。興味深いことに、灌漑設備は技術的に未発達なのだそうです、水をたくさん使わないと育成できない農業技術しかありません。イスラエルはそこが発達しています。水が貴重だからです。だから、渴くということがどういうことか良く知っているのですが、今イエス様は霊的な渴きについてお語りになっています。

1C 三つの部分の渴き

人間は、三つの部分で成り立っています。一つは体です。これは植物もまた動物も同じです。もう一つは、魂あるいは、現代用語で言えば精神や意識と読んでもよいでしょう。これは、うごめくもの、動物も持っています。そして三つ目が霊です。そして私たちは、罪の中にいると霊が死んでいることを知っています。イエス様によって、罪が取り除かれ、新しく霊が生きます。それが新生体験です。

私たちは三つの部分で、それぞれ渴きを覚えています。肉体における渴きはもちろんのこと、精神的な渴き、あるいは心理的、精神的な渴きと言ってもよいでしょう。それから霊的な渴きがあります。私たちに肉体の欲求の中で、空気への欲求が最も強いものです。その次に水への欲求が強いです。人体の 50-75%は水分でできています。この水分が足りなくなると、私たちは何としてみても水を飲もうとしてもがきはじめます。とても強い欲求です。

そして社会的欲求というものもあります。魂に渴きです。例えば、愛されることが私たちには必要です。自分がいかに愛されることによって生存できているのか、昔、残酷な社会実験が行われました。十三世紀の新生ローマ帝国の皇帝であった、フリードリヒ二世は「言葉を教わらないで育った子供が、どんな言葉を話すのか」疑問を持ったことがきっかけで、実験を行いました。五十人もの赤ん坊を部屋に入れて面倒を見るのですが、面倒をみる際、「目を見てはいけない、笑いかけてもいけない、語りかけてもいけない、ふれあいを一切してはいけない」と命じたそうです。乳母や看護婦から十分な乳は与えられていたのですが、愛情を受けていなかった赤ん坊たちは、全員死んでしまったそうです。同じように、戦後、ある心理学者が同じように乳児 55 人を、スキンシップなしに育てさせる実験を行い真下が、27 人が二年以内に死亡、残った 17 人も成人前に死んでしまい、残った 11 人は致命的な知的障害が残ったそうです。

こうした社会的欲求、感情の欲求がありますが、霊の欲求もあります。神ご自身を求めている欲求です。「ローマ 8:20 それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。」虚無に服している、すなわち空しくされており、それを満たすのは神しかいない、というようになっているということです。谷川の流れを慕いあえぐ鹿のように、生ける神を慕いあえいでいるとダビデが言った通りです。

2C 連動する各部分

私たちは、その神への渴きをはっきりさせているでしょうか？ はっきりしていないまま、何となく生きることはいとも簡単ですね。私たちは、体、魂、霊で成り立っていても、何をもって霊的なのか、それとも精神的なのか区別できないことが多いです。それは、その三つが深く連結しているためです。体に影響を与えるものが、精神に影響を与え、その逆もあります。箴言には、魂と体の関わりを言及している箇所が多くあります。「17:22 陽気な心は健康を良くし、陰気な心は骨を枯らす。」陽気な心、幸せな心は身体にも影響を与えます。

そして、感情的に影響を与えるものが、霊的にも影響を与えます。これがあまりにもつながっているために、どちらからのものであるかを識別することが難しいことがあります。感情的にまいてしまっている時に、今日は気分がすぐれないと思っていても、実は霊的な攻撃だったりするのです。この峻別は、神のみことばによって初めてできます。「ヘブル 4:12 神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。」本当は感情的な渴きを満たしているのに、霊的な

渴きを満たしていると思っていることがあります。礼拝が感情的はなっているのですが、感情は養っているかもしれないけれども、霊は養っていないことがあります。ですから、御言葉によって判別することが大事なのです。

3C 他の渴きで満たす試み

私たちは、それぞれの部分にある渴きに、それぞれ応じないといけません。霊的な必要を感情的な必要で満たすことはできません。身体でも同じですね。教会で交わりをしていたら、ちょっとすみませんトイレに行きたくなってきたとします。その生理的欲求のために、顔がしかめっつらになってきます。その時に、「あら、顔が何か暗いですね？大丈夫、元気出そうよ。」と言ったら、あまりにも的外れです！その時の必要は、すぐにトイレに行くことです！

その反対もありますね。愛情に飢え渴いているのに、物質で埋めようとします。両親が共働きをされていて、それで子供と時間を取れないので、申し訳ないと思って多くのおもちゃやゲームで補おうとします。けれども、物質が多くあってもそれでおかしくなっていく子供たちが多いのです。物ではなく愛情を求めている殻です。

そして、人の心の中にある霊的な渴きを、肉体の欲求や、精神的欲求、また宗教によって埋めようとしています。これが、まさに日本の社会でしょう。神以外のあらゆるものが備えられています。物質は豊かにあるし、社会的にも整っています。私たちにはすぐれた文化や芸術もあり、また自然もありますから、精神的な豊かさも埋められます。けれども、神への渴きがあるのです。神への渴きなのに、見事に神以外のもので埋めていこうとする、これが今の社会ではないでしょうか。この国は大水のように物質や精神は豊かなのに、霊的には国全体が砂漠のように荒涼としています。イエス様がサマリヤの女に対して、「この水を飲む者はだれでも、また渴きます。(ヨハネ 4:13)」と言われた、その言葉のように神への渴きを他のもので埋めようとして、それで渴いているのです。

4C イエスにある命

この渴きに対する答えは、「わたしのもとに来て飲みなさい」という言葉にあります。イエスこそが、神ご自身であり、命であります。この方のところに来ることによって初めて渴きがいえるのです。金持ちの青年の話は重要です。「尊い先生。永遠のいのちを自分のものとして受けるためには、私は何をしたらよいのでしょうか。(マルコ 10:17)」と尋ねました。イエス様は、「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかには、だれもありません。(10:18)」と言われました。それは、「教師のところに来て、命はない。神にしか命はない。」つまり、イエスご自身は教師以上に神ご自身なのだということです。イエスについて学ぶのではなく、イエスご自身のところに来ることです。この方のうちに命があります。

2A 「聖書の言っているとおりに」

そして主は、「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、」と言われました。聖書のどこの

部分を指しているのでしょうか？先ほど救いの泉についてのイザヤ書の箇所を読みましたが、もっとはっきり書いているところがあります。「44:3 わたしは潤いのない地に水を注ぎ、かわいた地に豊かな流れを注ぎ、わたしの霊をあなたのすえに、わたしの祝福をあなたの子孫に注ごう。」渴いた地に水が注がれますが、それは神の御霊を注ぐことといっしょに起こるという預言です。文字通り、荒野に川が流れますが、その水が表している神の御霊も注がれます。

3A 「生ける水が流れ出る」

1B 溢れ出る激流

そして、「その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」と言われます。「心の奥底」という訳は私はあまり好きではありません。直訳は「腹」です。もっと奥深い部分から、ということ。そして、「生ける水の川が流れ出るようになる」とあります。ここの「川」は、涸れ川などに使われる特別なギリシヤ語です。つまり、普段は降水量が少ないので涸れているけれども、雨が降れば川となって流れるものであります。この言葉を聞いた時に、私たち日本人には想像できないことをイスラエル人たちは思っていました。すなわち、「鉄砲水」です。涸れ川は水が流れてくる時は、徐々に流れるものではありません。一気に、急激に流れてきます。水がほとぼしり出るので。したがって、これは私たちが、からからになっている霊に対して、神の生ける水が鉄砲水として溢れ流れ出るということです。

これが、聖霊のバプテスマのことを指しています。自分では抑えきれない、とてつもない祝福された御霊の流れを経験するのです。

イエス様がこの言葉を宣言された時は、使徒の誰もが何のことが分かりませんでした。ヨハネは、他の共観福音書よりも50年ぐらい後に書いています。紀元後90年代に書いています。その時に宣言されたイエス様の言葉を後知恵によって、その意味を聖霊によって知らされたのです。それで、ヨハネの注釈がそこについています。「これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったのも、御霊はまだ注がれていなかったからである。」というものです。イエスが栄光を受けるとは天に挙げられることです。その前に、弟子たちには息を吹きかけて、聖霊を与えておられました。けれども、上からの注ぎ、聖霊のバプテスマは五旬節を待ったのです。

2B 神の聖徒の証し

私たちは、この体験が必要です。聖霊の与えられる流れが自分からほとぼしり出ることが必要です。私たちは前回、使徒の働きの中でそのような人々の姿を見ました。現代にまでこの働きは続いています。三人を紹介しましょう。イギリスで十八世紀、霊的覚醒が起こりましたが、その時に用いられたジョン・ウェスレーの記録です。「1739年1月1日のジョン・ウェスレーの冊子(日記)を読もう。ホール氏、ヒンチング氏、インガム氏、ホイットフィールド氏、ハッチング氏と、私の弟のチャールズは、フェッターレーンでの愛餐会に、60名ほどの同胞と共に出席していた。朝の3時頃、私

たちが祈り続けていた時、神の御力が私たちの上に力強く臨んだ。その結果、多くの人は歓喜に泣き出し、多くの人は床に倒れた。やがて神の臨在の畏敬と驚愕から少し立ち直ると、私たちは声を一つにして叫んだ。「ああ、私たちは神なるあなたをたたえます。私たちはあなたが主であることを認めます。」

そして、アメリカでの第二次霊的覚醒が、十九世紀に起こりました。その時に用いられた伝道師チャールズ・フィニーはこう書き記しています。(他書から引用)¹

さらに、十九世紀、二十世紀初頭に用いられたルーベン・トーレーも同じように述懐していました。(他書から引用)²

到底、私たちの前に広がっている渇いた地は、私たちの力で、福音で埋めることはできません。神ご自身の聖霊の力が必要です。

¹http://lib.missioncalvary.com/translations/Japanese/ja_01102_The%20Person%20Of%20the%20Holy%20Spirit_Chuck%20Smith.pdf 1-2 頁

² 同上 9 頁